

◆ 引越し顛末記・続き ◆

—信じられない五つのこと—

多谷 昇太

(二) 悪魔の追跡

かつて読んだ米国文学で「悪魔の謝肉祭」という本があった。村内にいつさい自動車走らせない（昔ながらの馬車のみ）という現代と隔絶したようなアメリカの片田舎（中西部だったか？）に都会から夫婦者が引越して来る。村はこれすべてトウモロコシ一色で年一回トウモロコシ祭を村民を挙げて行うほどにこれに依存していた。祭の王様と后を毎年男女一名づつ選ぶのだが図らずもこの后に引越してきた夫婦者の細君が選出される。この祭には絶対的な掟があつてそれは「女は（祭を）語らず男は見るべからず」というのだった。やたら薬草に詳しい、実質的にこの村を取り仕切る年配の女がいて、新参のこの夫婦者にあれこれと仕来り等を教えるのだが、ジャスト魔女風であり都会風ヤッピーのような夫の方がこれに反

目する。しかし妻は徐々にこの女に感化されて行くようで夫はこれに気が入らない。妻が祭の后に選ばれたのもこの女によるのだった。祭の日、村の女たちだけが伝統の衣装に着替えて祭りの場に集結する。男たちは参加することも見ることも許されない。しかし妻がいったい何をされるのかどうしても気になった夫はこの掟を破ってしまふ。すなわち茂みに隠れて祭の一部始終を目撃してしまふのだ。選ばれた王様がカーニバル風のマスクとマントを着けて現れ、これに女たちが恭しく付き添いながら地面に立てられた一本の柱へと彼を導く。件の魔女が呪文を唱えると女たちが王様のまわりをまわり始め、次々と彼に性的で卑猥な行為を為して行く。やがて王様は柱に後ろ手に括りつけられ衣装を剥がされる。すっかりいきり立った一物があらわれると「ヤードルー！」と女たちが叫ぶ。するとこんどは着飾った后が女たちに連れて来られて王様の前に立つ。それが妻だ。薬草でも飲まされているのか妻はやたら欲情的で女たち同様の行為を王様に為し、やがて全裸とな

って彼に後背位の位置に立つ。狂ったように女たちが「(トウモロコシの)種をなせ!種をなせ!」と連呼する。ふたりは交わりついに種を成すに至る。夫は悶々とするが恐怖で声が出せず何も出来ない。しかし短剣を持った魔女が近寄って来、王様の首をかつ切って鮮血がほとばしるに及び思わず小さな叫び声を出してしまふ。女たちの一人が「男が見ているよー!」と叫び夫は捕縛される。

夫は目をつぶされて盲目となり、その後誰の種なのか妻が産んだ子供とともにすっかり村の仕来りに従って無気力に生きるしかなかった。と原作では以上なのだが、その後「悪魔の追跡」と改題されてつくられた映画ではストーリーが些か違っていた。妻をその場から拉致してなんとか追っ手を振り切り、車で二人は村から逃走するのだ。ところが行く先々、立ち寄ったガソリンスタンドでも雑貨店でもホテルでも、またなんと駆け込んだ警察署でも、二人に対応する店員や警察官たちの様子が皆おかしい。いたずらに引き止めようとし、どこかに電話をするようだ。結局二人は追っ手の

手に落ち、その後の結末は原作の通り：なのだった。

さてなぜこんな話を冒頭に持つて来たか：なのだが、実は件のアパート退出後車上生活を経て横浜市港南区のアパートに入居するまでの数年間と、またそれ以降いまに至る、実に都合17年間に及ぶストーリーからの私の、逃避行、がこのストーリーのごとくだったからである。前作でも記したが件のアパートを出たあととも行く先々に例のストーリーカー四人組が現れた。そのことと、先の映画で逃避行を続けた夫婦の事情をなぜか皆が(ガソリンスタンド等の店員たちが)知っていて、二人の所在を村に知らせたという不可解さが私にも符号するからだ。またそれと同時に冒頭のサブタイトルに掲げた「信じられない5つのこと」の一つとして、この不可解さを私はまず挙げてみたい。どういうことか、次に記して行こう。

ストーリーカーのヤクザども、すなわち四人組はあたかもそれが彼らの、鳴き声、でもあるかのように「プータ、プータ」と私を連呼する。つまり

罵り続けるのだが、その彼らとは何の関係もない筈の、世間の少なからぬ一般人たちがこれと同じことをするので。同じ鳴き声を立てる。すなわち「プータ、プータ」と私を罵るわけだ。面識も何もない赤の他人である人たちがなぜ、あたかも私と私の事情を知っているかのように私を罵り、からかうのか、これが私には皆目わからなかった。そんな世間や人たちが、前期の本と映画内で、アブノーマルがノーマルを駆逐する、ような、異常で不可解な社会のごとしと私の目には写る。そこが逃避先の埼玉県であろうが茨城県であろうが津々浦々でこの罵りを受けまくるのだ。これが絶え間なく続くとノイローゼのようになってめげること甚だしい。まるで西部劇のお尋ね者のように私の指名手配書が全国にまわっている？とも思ってしまうほどだ。しかし前回のエッセイで記したがごくいまはその因もわかっている。つまり原因は霊視だ。最初のアパートで私の部屋の真下にいた夫婦者の女房が為したがごとき霊視である。ただ当時はこの霊視というものがかくも広範に、

かつ大勢の人間によって為されるものだとは思わなかった。車上生活の苛みとともにダブルパンチとなって容赦なく私を打ちのめした。この霊視と、この（謂わば）霊視社会が、5つの信じられないことのまじりつなのだが、ふたつ目はその（悪）霊視の信じられない、働き方、ということとを挙げねばならない。やや長くなるが以下に記して行こう。

車上生活をようやく終えて港南区のアパートに入居する時のこと、上記縷々記した霊視による追跡を知っていたので、私はアパート選びをする上でも自分に次の選択条件を課していた。もう二度とストーリーカー四人組に隣接されて住まわれたくなかったからだ。その第一は無理をしてでも家賃5万円ほどの部屋を借りること。始めのアパートは賃料3万円の1DKで、こう云ってはなんだが住む人間の質もある程度家賃の額に比例するのではないか、などと危惧したからである。あの蹴飛ばし合いを体験したからには自分で云うのもなんだがそれも無理からぬことだった。二番目は二階

に住むこと。こちらも階下の夫婦者（もちろん野郎の方だが）のあの凄まじい足踏みを体験したので、あれがもし頭上で行われたら堪えられまいと危惧したからだ。三番目は角部屋であること。2F角部屋ならば例えモンスター住民がいたとしても受ける迷惑の程度が少なく済むからである。そして最後の条件は云わずもがな、真下の部屋と隣の部屋にすでに人が住んでいることだった。すでに人が住んでいるなら奴ら四人組がそこに入ろうとしても当然無理だからだ。この条件のもとに以前の鶴見区は避けて海沿いの金沢八景辺りから探したが（下町を避けて郊外に出たかった）この四つの条件に合うところはなかった。なにしろどこも空き部屋が多くてまれに条件に合いそうなどころがあっても今度はなぜか断られる。できるだけ鶴見区に近づかないように、京急の駅のうちでめぼしいところを上って来る。勤めの合間の休日だけを利用するのでハカが行かない。車上生活を早く断って畳の上で寝たかったこともあり焦燥ばかりがつのる。そうするうちにやがて上大岡に至

った。不動産屋が何軒もあつて一通りまわったがそれ以前と同じ塩梅で条件が合わなかったり、稀に条件が合いそうところがあつて口入れをしても後日になつて断られた。ここにいたつて不審感が増してくる。どうも何かおかしい。

元のアパートの大家のテリトリが鶴見区だったからボーダーラインはどうしても鶴見区以西にしたかった。特急が止まることもあり上大岡あたりがやはりよいのだが致し方ない、そろそろあきらめて駅を変えようとしたがそのとき「いま一軒」という想念と云うか、誰かからの伝達のような思いが感じられてふらふらと上大岡アーケード街の裏手の方に導かれるように入つて行く。こんなところには不動産などあるのかと歩き行く先に間口二間ほどの小さな店があつたのでそこに入った。七十くらいの親父がいて好々爺然とした風情、私の要望を聞いてすぐに賃料5万円で2DKのアパートを紹介してくれた。四世帯アパートの2F角部屋でいま空いているのはこの部屋だけ、ほかは埋まっているとのこと。一応願つてもない条件だ

ったがただ場所が上永谷だった。躊躇しないでもなかつたが強く勧めてくる。とにかくいっしょに見に行くことにした。上永谷駅から徒歩10分ほどのアパートは確かに説明通りでアパート前には駐車場も付いている。中の造りは風呂桶と云いトイレと云い旧式だったが思ったより広い。私の希望通りで断る理由はないのだが：なにか、なぜか引つかかる。私はしつこいほどにいま居る住人たちのプロフィールを彼に訊いた。気になる真下の部屋は大家の弟だから間違いのない人で、隣は勤め人の女性、その下も男性の勤め人とのことだ。この住民像も願ってもないものだった。その私の様子を鋭く見ながら「とにかく口入れだけしておけばよい。まだ仮契約ではないから断ることもできる」などと交渉上手に云われ、私は応諾した。では店に戻って申込書を書いてくれと云われ部屋から出たとき「ふふふ、願ってもない環境でしょう？角部屋だし、隣は埋まつてるし」などと揶揄う女の声我心中に伝わって来た。どこかで聞いたような声だ。またぞろ嫌な気になったが頭を振っ

て不動産屋の車に乗り込んだ…。

以上つらつらと記した一連のことが実は先に記した、ワル、霊視の「働き方」に当たるのだ。と書いてもピンと来まいが結論から云ってこのアパートこそが件のチンピラヤクザ四人組の胴元、つまり親分（ではないかと私が疑っている人物）の持ち不動産だったのだ。幾許もなくここに男女四人組と、その後しばらくしてからなんと前のアパートの私の部屋の真下にいた夫婦者までもが移り住んで来た。悲惨を極めた車上生活の果てにかんだ畳の上の生活だったのに、再びの悪夢がまた始まるうとしていたのである。平成17年のことだった。

5つの信じられないことの一つ目が「霊視と霊視社会」で二番目がその働き方の驚異なのだが、はたして誰か信じるだろうか？このように心中で誘導されるといふ禍々しい事実を。おそらく眉唾ものと思われるだろうが、実は、悪、霊視の災禍はこればかりではない。こちらも番号を振っていくつかでも列挙できるのだが、余りそれをやっても

読む人に煩わしくなるので、ここでは簡単に、まとめて紹介しよう。

そもそもなぜ、私にとつてこんな見つともないこと甚だしい顛末記を書くのかと云うと、この悪霊視による災禍はひとり私だけではないだろうと思うからだし、これを知っていただけでいいだろうとその災禍が減るだろうと思うからである。「あ、これは悪霊による語り掛けではないか？」と自分ちよつと待てをすることもできるわけだ。

さてではその厄病神的な働きの数々だが以下にまとめて記す。奴ら、悪、悪霊視者たちは、人の暗証番号やパスワードを盗む、人間ナビゲーターのごとく憑く者の居場所を知る（隠れることも逃げることも出来ない）、あなたが敬愛している人物などを装って心中であなただけに語りかける、あなたが小説等を書く人であるならばそれを全部見られて盗作される：等々だが、実際に始めのパスワード云々のことで私は最近次のようなことを体験した。某有料ネット小説のサイトで投稿したばかりの作品を目の前でズタズタにされたのだ。ページ

を滅茶苦茶にされたり文章をまとめて消されてみたり、面白がるように、揶揄うように、何度でもやられた。決して何かの不具合でもなければ私の操作ミスでもない。明らかな悪意を目の前で見せつけられたのである！このサイトに入ってから編集するにはパスワードが要る。「もしそのパスワードが知られたら第三者が悪戯できますか？」とサイトを運営する会社に問い合わせたところ「それは可能です」とハッキリと云われた。このサイトには無料で自由に投稿でき、最近それを知って嬉々として使っていた私は目の前が真っ暗になった。こんなことをされたら何もできなくなるからだ。おっつけその犯人は知れている。ストーカーし続け、いまも私の部屋の真下（いまはその港南区のアパートではなく秦野市内の某団地五階に転居している）に、また隣の部屋に移り住んで来た例のあの、四人組だ。想像だがこうして隣接して住まうことで騒音立てや罵りの行為を間近ですることが出来る、そうすると私の心は常にイライラして調和することができない（満足に眠れさえ

しないのだから尚更だ。すればこの混乱した私の心身の状態こそが、彼らが憑く上で都合なのだろうと思う次第である。まあそれはともかく、ではそのサイトの仕儀をどうしたかと云うと、もちろん私はパスワードを変更したのだが、それをする上に於いてその新パスワードが、わたし自身に知れる、見れるなら彼らにもわかってしまうので（なにせ、わたしの眼を通して霊視しているのだから）、私はネット小説のパスワード変更画面を前にして目をつぶり、パソコンのキーボードをランダムに叩いたのである。新パスワードはすべて伏せ字で出て来るのでこうすれば私自身にもわからないわけだ。そしてこれを使ったところ以後サイトでの悪戯行為はピタリと止んだ。この事実だけからしても諸氏に於かれては私の述懐が荒唐無稽、妄言綺語の類ではないことを理解していただきたいものだ。

ところで、もしこの悪霊視の使われ奴どもに世の権力者や金満家が絡んだら、つるんだら、どうなると思いだろうか。このチンピラ四人組がい

かに頑張ろうとも、金が、お金がなければこいつらは三日ともたないのだ。私同様に毎日働かなければ生活を維持できない層の出身者に決まっているからである。それなのになぜ、いまに至る17年間もの長きに渡って働きもせずに（ほとんど1日24時間、1年365日に渡ってこいつらは家の中に居る。四六時中四人組が同じ声で罵り続けているのでバカでもすぐ判る）、ストーリーカー三昧を続けられるのだろうか？暮して行けるのだろうか？云わずもがな、つるむどころか他ならぬその権力者・金満家自身（つまりヤクザの親分）がそれをやらせているのだ。毎日の生活費×17年間×四人分Ⅱの金額がどれほどのものになるか、どんなバカでも容易に想像がつく。ついでにこちらも想像だがこの莫大な金は「おまえたちが結果を出せばチャラ」、「出さなければ借金とするぞ」とでも云われているのだろうか。彼ら四人組は抜けようにももう抜けられないのだ。ストーリーカーをし続けるしか既に生きる道はないのである。ケツをまくって逃げようにも因果報応というもので、彼ら

はこんどは同じ、霊視、が怖いのだ。その効果のほどと執拗な様は自分たちが熟知しているところである…。

さてだいぶ話が飛んだ。港南区のアパートに引っ越して以後のことを語ろう。転居してからまず起こったことが真下の部屋の、大家の弟と不動産屋から伝えられた男の起こす「プータロー！」の罵り声と足踏みと天井叩きである。次には2F隣の部屋から「(出て)行けよ」なる女の声が四六時中伝わって来るようになる。そしてそれは紛れもなく、鶴見区内の始めのアパートで、私の隣室に居て他の店子たちとドアの蹴飛ばし合いをしていた、例の孤立して貧窮の極みにあったアベック、就中女の声と知れる。当時は愛想尽かしをした相手の男への「行けよ」だったのだろうが、今度は私への「出て行けよ」となっているわけである。しかし引っ越して来たばかりの人間に「出て行けよ」はないだろうし、さらに奇怪なのはその部屋には独身の勤め人女性がひとりで住むと聞かされていたのに、男の声もし、そしてそれはかつてア

ベックだった方やの男のそれではなく、なんと男と蹴飛ばし合いをしていた、ヤクザの義兄弟のうちのひとりの声だったことだ。意味するところは自明だろうが、ともかくも、私にとって悪夢なことは、その女がそこに居た、ということである。

(続く)



こんな感じの部屋。ここで悪夢が再開した。決してすべてとは云わないが大家と不動産屋の恣意には果てしがない…